

# 研究会報

第14号 (復刊 第144号) 2017・6

随想

## 分田のあれこれ

―旧筑後国生葉郡新川村分田の生活覚書―

久良木 千ヨ

はじめに

昭和一九(一九四四)年九月太平洋戦争の末期に、私は旧浮羽郡姫治村(現、うきは市浮羽町新川分田)の野上家の長女として生を受けました。先祖は有馬藩の山守(やまもり・山の管理をする仕事)という役目を担っており、林業を



写真1 野上家全景

生業としておりました。今から思えばおこがましい事ではございますが、独特の生活の中での成長過程だったような思いがいたします。幼い頃の体験や記憶していることなどを、思いつくままに書き綴ってみました。

近い将来、またその先々の人たちで、この家に何らかの繋がりのある人や興味を示してくれる人が一人でもいて、この文が何かのヒントになるならば幸せに存じます。

私たちが暮らしていた家は現在、蔵はギャラリーとして、母屋は週末のみのランチのレストランとして私の身内が経営いたしております(写真1)。

### お精進の日と御法事

古い家だと御先祖様の数もかなりの人数ということになります。各個人の命日の朝の味噌汁は、いりこなしのだし汁ということでした。勿論その他のおかずも卵をはじめ、干物、ハム等生臭物は

一切食べてはいけません。まあ、月命日のご先祖様は朝のみでしたが、祥月命日ともなると一日中生臭気はタブーでした。

台所の壁に精進の日を書いた紙が貼ってありました。名前がわかっていただけで、一か月に一日ありました。御法事は従って毎年のように行われていました。その日が近づくと二、三日前から元料理人だったという初老の男性が呼ばれて、献立を作り、材料を仕入れ、料理の下準備にかかります。当日は朝から近所のおばさんや家のお手伝いさんたちに指示しながら精進料理を仕上げます。

私がお手伝いさんたちから指示しながら精進料理を仕上げます。私がお手伝いさんたちから指示していたのは、赤い海藻(「とさか」と言っていました)を煮詰めてドロドロの糊状になったものを(寒天を入れたかもしれませんが)、流し箱に入れて固めると赤い蒟蒻のようなものになり、それがお刺身の代わりになっていました。お客様が見える頃になると、ちよつとおめかしをして御挨拶をしたものです。

一昔前までは嫁いだらなかなか自由に里帰りできない時代で、実家の仏事と言えば里帰りも認めてもらえなかったでしょう。私が子供の頃は、野上家から嫁いでいった叔母、大叔母は八人でした。大人にとっては忙しい大変な事だ



写真2 野上寛次・タカ夫妻

ったと思いますが、私にとつてはなんとなく心浮き立つ日でした。

### 野上藤右衛門と伊代次

藤右衛門、この人は野上家の家系図で明確に経緯を辿れる最初の人です。それ以前の人々は私の知る限りでは、残念ながらはつきりしないのです。天明七(一七八七)年生まれ、文久二(一八六二)年没、享年七五歳です。彼は「おへぎ」の器械の考案者として、息子の伊代次と共に野上家中興の祖と言えるのではないかと思われまます。ただどのような人柄だったかは何の逸話も私は聞いておりません。

伊代次、この人は藤右衛門の長男で父を助け、やはり中興の祖の一人だと思われまます。文化四(一八〇七)年生まれ、明治七(一八七四)年五月二〇日没、享年六七歳です。文久二年伊代次が五五歳の頃、伊勢神宮参りに出かけ、途中の京都で反物や什器類等沢山の買物を楽しんで帰宅しています。文久二年といえはその頃の京都は倒幕運動の真つ盛りの時期、市中には勤皇の志士や新選組が闊歩している物騒な時期のはずなのです。しかし一般庶民はあまり深刻なというより、大変な時代になりそうと思いつながら日々の生業を営んでいたのかもしれない。もつとも私の独断と偏見の見方をするならば、当時藤右衛門も伊代次も意外と時代の流れを敏感に受け止めて、伊勢参りを口実に京都の情勢や世の中の変化等を把握しようとの思いもあつて、出掛けたのかも知れないと勝手に想像しています。

### 寛次じい様

激動の幕末から明治という時代に変わり、伊代次の子として生まれた寛次(写真2)は、山林家野上の礎を作った第一人者と言えます。若い頃は一時期日田の広瀬淡窓が開設していた咸宜園に入塾して、勉学に励んだ事もあるそ

うです。この人の妻タカ(写真2)は日田より嫁いで来ています。彼の叔母津代がこの頃日田の代官の下に居たとすれば、甥の為に何かの関わりがあつたのではないかと、私が勝手な想像を巡らせているところです。彼には子供がなく、したがって家にとつて跡継ぎが一番大事な時代としては、一番下の弟守七を養子とせざるを得なかつたのでしよう。天保七(一八三六)年一月四日生まれで大正九(一九二〇)年一〇月五日没、享年八五歳でした。当時としては正に激動のなか大変な人生だったのではないかと思うと感慨深いものがあります。

明治四二(一九〇九)年生まれの私の大叔母松本ユキヲの思い出話によると、寛次は幼心にもとても優しく、彼の膝に抱かれて「おまえはよか子じやのう」と、いつも可愛がられていたそうです。

また彼の妻タカはとても気位の高い人だったそうです。当時天領日田は普通の藩とは違うというプライドをもつた人が多かつたそうです。体が弱いという理由で、朝は九時か一〇時頃起床して、一人で朝食、朝酒というような事もしばしばだったそうです。寛次とタカの「婚姻届」は古い書類によると、トイが生まれた年つまり

元治元(一八六四)年となつています。この事が正確か否かは定かではありません。寛次としてはかなり不満もあつたのではないかと思われのですが、しかしその事に関して不満は一度も漏らさなかつたと聞き及んでいます。それよりも朝、弟守七の嫁トイがどんなに早起きしても、「おーお、もう起きたの、まだ早かばい！」とトイを労わつてくれたとの事です。

明治の時代になり世の中は一変したはずです。志ある若者は何かをその手でつかもうと、活動し始めたと感じます。彼もまた田舎にありながら活動を徐々に始めていったようです。残っている文書から見えてくるのは、毎年のように借金を繰り返しています。山を買い田畑を買い、我々子孫の為に文字通り身を粉にして働き、その借金は返済されています。野上の家を盛り立ててくださった大恩人だと思つています。

浦山の堤を造り、新田の開拓を成し遂げたのは明治二二(一八八九)年です。当時野上家は日給でその日その日に賃金を支払つており、本村の酒屋さんの前は、夕方になると人々で大変な賑わいだったそうです。

明治一九年には「山戦争」なる文書が存在しています。正確な内

容は判りませんが、聞くところによれば、有馬藩の山守をしていた関係から官山(有馬藩の山)の払い下げを巡って、争いが起きて裁判にまで発展したことがあったようです。なお、この年に守七の長男住五郎が誕生しています。その争いが解決したことで、浦山の堤の建設ができたとのことでした。

ちなみに寛次とタカ夫妻の晩年の写真(写真2)は、表の蔵の二階の長持の上に展示しています。

### 一回半嫁いだおつばあさん (本名津代)

文政三(一八二〇)年六月二十九日、津代は私たちより六代前の伊代次の妹として分田野上に生を受けています。父は藤右衛門です。今の家が建つ前の事ではつきりした資料はないのですが、もっと小さな建物だったようです。姉妹の一人は恵利の延寿寺に嫁いでいたということでした。

私の大叔母で当時(二〇〇九年)九九歳の話によれば、津代は日田のお代官の側室となり、奥方様の名代として宇佐八幡宮に詣でた事があります。そのことが彼女の矜持となっていたそうです。御駕籠に乗り供を従え、「下にー、下にー」とのかけ声の中進んで行った話です。

しかし私たちが父や祖母から

聞き覚えているのは、一回半も嫁いだ人ということでした。何故半かといえば同じ所に二回嫁いだ、という落ちまでついていたので、子供の頃、盂蘭盆の一五日、家族で仏様送りの参りにお墓に行き、彼女のお墓の前で度々その話が出ていたので、私にはとても興味のある先祖の一人でした。

明治維新の時、彼女は四八歳になっていました。曾祖母トイ(守七の妻)が嫁いで来た頃、おそらくは明治一三(一五年)ぐらいと思われるのですが、日田の代官所も当然廃止され、津代は実家に帰らざるを得なかったでしょう。トイが嫁いだ頃津代は六〇歳代になっていて、金井原の山裾に庵を建ててもらい住んでいたようです。月々の生活も困らないようにしてもらっていたのですが、月の前半には殆ど酒代に変わっていたそうです。夕方になると「トイさんお酒くれんの」と、度々家に来てはトイを困らせていたそうです。

彼女は明治二九(一八九六)年一月八日、七六歳で他界しています。「一回半も嫁いだ」というより、最初は行儀見習いのような形でどこかのお屋敷に上がり、徐々にキャリアを積み、奥女中さんとして、あるとき日田のお代官の目に止まり、側室になったとい

うことではないかと私は思っています。

有馬藩の山守という立場にいた野上の家には、山見回りの御役人たちが度々逗留して、山の検分をしていた様です。曾祖母トイの話によりますと、昔お座敷裏の廊下の先にトイレとお風呂場があり、お役人や僧侶など特別のお客様が宿泊される時は、男衆がお湯を沸かし担いで湯船に入れておもてなしをしていたそうです。このようなことから、野上の家にはお侍や僧侶との伝手もできた、ということが私の勝手な想像です。

これも私の勝手な想像なのですが、津代はきつと美人だったと思っています。あるとき日田に行った折りに代官所の事を尋ねてみましたが、残念ながらその時は何も分かりませんでした。代官といえども江戸から赴任するいわば単身赴任のお役人で、任期が終われば江戸には御正室がおいでと思われれます。下世話に言えば側室、つまり現地妻なのではないでしょうか。

何時の間にか「一回半も嫁いだ」と子孫は面白可笑しく語り継いでいますが、彼女が現役の時はお御駕籠で里帰りし、お供を連れて賑々しい事だったと大叔母松本ユキヲから伝え聞いています。いくら山守とはいえ、農家の娘が日

田の天領の御代官の側室という身分は、当時としては考えられないような破格の事ではなかったのかと感じています。幕末何年頃側室だったかは定かではありませんが、明治維新で彼女の人生も一変してしまっただけです。天領もなくなり寂しい老後だったのでしよう。

もうひとつ彼女の話がありました。明治維新後西南の役等元武士たちの乱があちこちで起きています。秋月の乱もその一つで、その残党なる人が三、四人殺気だつて来たそうです。家人は皆震え上がっている時に、津代が薙刀を持って「その者たち、お静まりめされ！」と一声を発すると、残党たちはすくすく逃げて行ったという話が残っています。事の真偽の程は判りません。

### 野上一閑入道

小学生の頃、父親と兄弟とともに正月三が日の前後に三社参りとして、本村妙見神社と野上一閑入道の祠と太宰府天満宮に出かけるのが習わしとなっていました。その中で野上一閑入道なる人は、野上家の先祖の一人として突然祖父や父たちが話すようになります。正月の行事に加わってきたような思いがあります。理由は定かではありません。



写真3 野上トイ

彼は戦国時代大友家に仕えた武將で、当時大友勢と秋月勢はしばしば小競り合いが生じており、天正九(一五八二)年一月八日の早朝に大友勢の中から一閑が原鶴志波の瀬矢原の川原に躍り出たそうです。対する秋月勢の中からは三奈木弥平次(年齢一六歳)と名乗る若武者が現れ一騎打ちとなりました。弥平次もベテラン一閑にはあえなく組み伏せられたとのことです。しかしこの事を境にしてこの戦は混戦状態に陥り、お互いに引き分けとなったそうです。

この一閑入道とその後どのような系図の流れがあったのかは私の知る限りでは判りません。ただ、「文献」のみ存在します。また、彼の祠が何処に存在するかといえば、杷木のどこかの田んぼのあぜ道をかき歩いて行った所に、小さな祠があったと記憶しています。それ以外の事は全く判りません。

### 井手(九州電力会社水路)の前身について

熊本を通潤橋の完成が嘉永七(一八五四)年です。この時の製作集団が種山石工といわれています。熊本県八代市に居住していたとされ、その中に小野尻丈八(後の橋本勘五郎)なる人物がいました。その弟子の一人がうきは市吉井町の本仏寺の石垣を築いた人です。この小野尻の弟子と浮羽町新川栗木野在住の石工(氏名不詳)が中心となり、野上家の石垣を築いたという話を昔岩橋重太さんに聞いた事があります。彼は御先祖の代から兄弟そして娘さんたち迄も、野上家の山、田畑、家の外廻りの管理等あらゆる事にお世話になった忘れられない人々です。

幕末当時の野上家の背景として現在の家は安政三(一八五六)年に完成しているので、私の推測としては家の完成前には水路つまり井手は存在していたと思われるます。

私共より七代前の藤右衛門とその息子伊代次、この二代のご先祖が、竹製品特におへぎ(小型のお盆のような物)や竹の皮、物差し等を販売して財をなし、現在の家を建てたと伝えられています。

野上家は当時有馬藩の山守と

いう役目を担っており、当地の地形は悉く知りつくしていたと思われまふ。したがって水路の高低傾斜角度などの配慮は、わりに難なく工事が出来たのではないかと思うのです。

### 散髪脱刀令(明治四年公布)の頃

曾祖母トイの父上久保田茂吉さんは、千歳村現在のうきは市の能楽の庄屋さんでした。主に土木関係の仕事だったそうです。幕末の長州戦争に二回も出兵されたそうです。縁の下の支え的任務で、兵たちの兵糧米や、わらじ、薪などの手配の責任者だったようです。その後明治になり世の中がすっかり変化して、身なり等も変化が求められる時代に成りつつあったのでしよう。土地の指導者的立場にあった茂吉さんは、明治五(一八七二)年に村の中で一番に鬻を切り、いわゆる「ざんぎり頭」にされたそうです。曾祖母トイ(写真3)の実父である茂吉さんが床屋さんから帰宅した時は、とっても驚いてしまったそうです。この話を聞いた時は、確か小学校の二年生か三年生だったと思います。トイがその話をした時の何とも嬉しいような、懐かしそうな、そして一寸はにやにや彼女顔が何故か忘れられません。「ざんぎり頭を叩いてみれば文

明開化の音がする」。

### みい寺もどーる

私は五、六歳の頃迄私は友達とあまり遊んだ記憶がありません。小学校に入学してからはそれなりに友達も出来ましたが、それまでは大人社会の中での生活だったような気がします。その理由は私が一番上の子であるという事、体が弱かった事、その両方であろうと思います。という訳で退屈すると曾祖母トイ(写真3)のところに行き、「ばばちやま、肩たたきますき、何かお話ししてください」とお願いしました。小さな手で少し肩を叩いたからといって、気持ちが良いなるわけでもないとなら言えるのですが、彼女はとても優しく「ほんなら、たたいもらおかの」、「何の話がよかるかの」と私に問いかけてくれるのです。「みい寺もどーるが、よかです。」という訳でこの話が始まるのです。曾祖母は元治元(一八六四)年生まれで、私は昭和一九(一九四四)年生まれ、なんと八〇歳違いです。

「あるところに、みい寺という、小さなお寺があったそうです。この鐘の音はそれはそれは綺麗な音色で、誰もがその響きにうっとりしてしまふのでした。この事が段々評判になり都の大きなお寺

にもらわれて行きました。都に着いて人々が待ってましたとばかりにその鐘を撞くと、どうしたことでしよう。鐘はとても悲しそうにそして汚い音で、「みい寺もどーる：みい寺もどーる：」と何回撞いても、誰が撞いてもそのように鳴るのだそうです。とうとうその住職さんはすっかり怒ってしまつて、その鐘を高い橋から川底に投げ捨ててしまつたのです。鐘はもう粉々に割れてしまい、そこからじゅうに散らばつてしまいました。その夜、川に住む魚や近くに居るネズミ、猫、犬、牛、馬、猪、山鳥等ありとあらゆる動物たちが、その破片を拾い集めつなぎ合わせて、みい寺に戻したそうです。みい寺に戻つた鐘は今でもデコボコ継ぎ接ぎだけど、又都に行く前のあの素晴らしい鐘の音を響かせ、皆を和ませてくれているそうです。」

私はこの話で「みい寺もどーる、みい寺もどーる」と語つてくれる曾祖母と一緒に、この言葉を大きな声で唱和するのです。その事がとても楽しく嬉しかったことが思い出されます。

### 役に立つ木灰

(一) 木灰  
最近はお所の洗剤などはとても上質な物が市販されているの

で、食器などの汚れも落ちてピカピカに成るのが普通の事です。しかし私の幼い頃はあまり質の良いくない磨き粉が少しあつたくらいです。普段は殆どが水洗いで、油物にはお湯をかけて洗つていたようでした。それでも毎日使用していると、どうしても隅々がすつきりしなくなりくすみが出てくるのです。それを除去するためにお盆と暮れに必ず行つていたのが、「お磨きもの」というわけです。一番大きな鍋に日頃使つている食器類を入れ、木灰(もくばい)と呼称)を手のくぼ三、四杯と言つて入れていました。ちなみに「手のくぼ」とは両手を合わせて何かをすくい上げるときの手の形を言います。灰をいれてからは三〇、四〇分ほどグラグラ沸騰させるのです。その後水洗いをすると、あらまあ!ピカピカになっていました。

### (二) 蒟蒻

蒟蒻と言えばスーパーに常時販売していますが、幼い頃は何かある時の前に手作りをしていました。蒟蒻芋を大鍋でグラグラと一時間位炊いて皮をむき、それを木臼でぼろぼろの状態(一粒が胡麻の半分位の大きさでしようか)迄ほぐします。先に木灰を桶に入れ、水を入れ、良くかき混ぜて置く置きます。その後木灰の上澄み

を、ほぐした蒟蒻に混ぜながらよくなじませます。そして糊状になったものを流し箱に入れたり、丸めたりします。殆どは流し箱だつたようでした。手触りの加減でぷるぷるの状態になつたものをさらに茹で上げて、出来上がりという訳です。木灰の上澄み、つまり灰汁の濃度は全くの勘でしかなく、たので、良く出来ていたと思えます。今でも手作りの蒟蒻を販売していますが、今では木灰を使用している所はおそらくないと思えます。

なお火鉢の灰は年度末とか御法事とかの前に、稲藁を燃やした藁灰を沢山作つて入れ替えていました。サラサラとふわふわとした灰の感触が、私はとても好きでした。

### 小学校の行事

#### (一) 縄ない競争

一年生の時「明日は縄ない競争があります。皆藁を持ってきてください。」という先生の言葉でした。家で男衆たちが雨の日などに小屋のなかで縄を縄っているのを見ていたので、大体の事は分かつているつもりでした。さて学校に行つて、最初に縄をどのようにして縄い始めてよいか、さつぱり分らないのです。他の友達の縄い方を真似るしかありません。

利き足の親指に藁を巻き付けて、そこから少しずつ両手をすべらせながら、その手の中に藁を捻つて縄にしていくのですが、はてさて藁を何本ずつ縊つて行くのかが分らないのです。家で見ている一・五センチメートル位の太さにしていたら、私の小さな手では藁はとても動かず、縄にはならないのです。しかも私の回りに人垣が出来ていて、ゲラゲラと笑つているのです。どうしたらよいかわからなくなつていたら、そんなに沢山の藁ではなく、二、三本ずつをより合わせていくのだと親友が教えてくれました。何メートルぐらい縄つたかは忘れまじつたけれど、それに残つた藁をぐるぐると手に巻き付けて「すこき」をかけます。つまり出来上がった藁に「みがき」をかけるのです。その当時新川小学校(現在の姫治小学校)区では、年一回農産物の品評会が催されていて、その会に学校も生徒の縄を出品していたのです。学年毎に入賞者が決まりました。何故か私の作品(と言えりかどうかわかりませんが)が三等になつたのでした。この行事は私が三年生位で終わったような気がします。

#### (二) 蠅打ち(蠅たたき)作り

昔はどこの家も棕櫚(しゆる)の葉で蠅打ちを作っていました。

その当時多くの家で主に牛でしたが、中には馬のところもありましたけれど、農耕用に飼っていません。そんなわけで、衛生状態は今から考えると相当ひどいものでした。蠅がいるのは当たり前で状態という訳です。祖父住五郎が毎年四、五本作っていた気がしますが、そんなわけで学校でも蠅打ち作り競争が催されていました。前日に棕櫚の葉を用意して学校にそれぞれ持っていくのです。あの時作り方の説明はあったのかなかったのか、記憶にないのです。祖父が作るのを見ていたので大体の事は分かっていたつもりでしたが、それはもう難儀な事でした。

一番に葉を枝のつけ根から一、一二センチメートルのところを丸く切り揃えます。葉脈にそって一本一本裂いて、その裂いたものを堅く細い紐で編んでいくのです。小さなトゲがありチクチクと手に刺さり、痛いのと手に力がないのとで悪戦苦闘して、気持ちだけあせりまくりました。まわりの友達はまだだんだん出来ていくのに、私は何にも出来てなくて半泣き状態でした。あの時作品が出来上がったのかどうか記憶はありません。二回ほどでこの行事はなくなつたと思います。

### (三) 田植え休み

毎年農繁期になるとこの農家も、猫の手も借りたい程当時は忙しかったようです。まして小学生ともなれば立派な働き手だったので。という訳で学校も休みになっていました。「田植え休み」です。三日位ありました。全校生徒が講堂に集まって校長先生の前で、休み中どの様なお手伝いをするかを、一人一人述べて順次帰っていくのです。私は「弟や妹の記憶がありますけれど、低学年の頃は遊んでばかりいたと思います。ただ田んぼに皆と出かけて稲苗を抜き取って、一〇センチメートルほどの束にまとめたり、邪魔になりながら苗を少し植えたことはあります。夫は八女市上陽町の出身ですが、四月末頃から五月にかけて「お茶摘み休み」が一〇日間位あったそうです。あるとき学校の廊下で先生方が「こんな休みがあるけん、尚更授業が遅れるとですよ」と話されていたのが、今でも耳の奥に残っています。この行事は昭和三二、三三(一九五八)年頃迄あったようです。

### いろいろな出入の人々

#### (一) 塗り師

塗り師と言うかどうかは分か

らないのですが、私が五、六歳の頃は、表の方の小屋に莫塵を敷いて、傷んだお盆、お椀、足つきの膳等々を刷毛でいとも速やかに塗り直していたのをかすかに記憶しています。「宇和島から来た」と聞き覚えてはいますけれど、今思えば輪島の間違いだったかも知れません。何日か泊まり込みでした。何しろ交通事情の悪い時代ですから、仕方なかったのでしょう。私はその仕事で面白く、また珍しくずっと眺めていると、「お嬢ちゃん、あまり近くで見ていると、かぶれるよ。」と注意してくれたのを思い出します。

#### (二) 桶屋さん

本村に今も桶屋さんの家があります。私の小学校の同級生が居て、彼女のお父さんとお兄さんが、桶やざる、しょうけ等の修理や製作を、代々生業にしていました。冬近くなると表の小屋に莫塵を敷き、酒屋さんの名前のついた厚手の前掛けを膝にあて、前もって山から切り出した長い竹を、いとも軽々と肩にかついでスースースーとあつという間に、細い竹ひごが出来上がっていく様は、珍しく面白くよく眺めていたものです。竹ひごが出来ると、そのひごでざるやしょうけを編んでいくのです。手際よくスースイと編まれて形が見えてくると、それはま

た何とも言えず子供心に嬉しかった記憶があります。板を一枚一枚同じサイズの物を作り、大きさにもよると思うのですがそれを寄り合わせて、竹で編んだ箍(たが)をはめて一つの桶が出来上がる光景が、またまた珍しく楽しく眺めていたものです。

#### (三) 杉の実取り

確か小学一年生か二年生の頃と思うのですが、父が一〇人位の男の人たちを連れて帰ってきたことがあります。その人たちは、杉の木に登りその実を収穫する人々でした。杉の実は少し濁った緑色をした二センチメートルほどの物でした。「めぐ」といわれる直径一メートル、高さ五〇、六〇センチメートル程の竹駕籠に一杯詰められていました。その「めぐ」が「ごぜん(御前)の間」の土間に、いくつも置かれていました。勿論家では三食用意していました。

杉の木に一人一人登り、木に登ったまま、つまり下に降りることなく、木から木へと、飛び移るのだそうです。父の話では、「まあ、とてもじゃないが人間技じやなかばい。下から見よつたら、ハラハラするたい。」と興奮して話していたのが、目に浮かびます。残念ながら私は現場を見たことがないので、詳しくは分かりません。

当時昭和二六、二七年頃から三〇年頃迄は、荒れた山々に杉の実を植えて山を育てる気運が高まっていた頃だと思われます。

### 河童のごちそう

現代の日本では野菜のほとんどが季節感がなくなっているようです。特にトマト、きゅうり、なす等は、年間を通して店先に並んでいます。しかし私たちの幼い頃は、なす、トマト、きゅうり、カボチャ等の野菜は、夏の物と言う観念が強かったのです。

夏の最初に採れた野菜は、まず二、三本ずつ家の下の川に流していました。その年の初物を近く橋の上から河童のご馳走として流すのです。そうすることでその夏は、子供たちが水浴びしても河童に引かれる事なく、無事に一夏を過ごすことが出来る、という言い伝えがありました。勿論迷信なのですが、子供心に河童の存在を半ば信じていた気がします。空腹になった河童は子供を捕まえて川底に引き込む、という言い伝えでした。あまり深い所で遊んではいけないと子供たちを諭したものであったのでしょうか。

### 蔵の中の宝物

今年平成二九年になつてある論文<sup>(註1)</sup>をいただきました。太平

洋戦争中及び戦後の文化財保護に関するものでした。現実には昭和二〇(一九四五年)三月から翌二一年六月迄の間、宝物を預かっていたことが判明しました。

第二次大戦の末期福岡、久留米等も爆撃に襲われました。時の政府は国宝やそれに準じる宝物も人々同様に疎開させたそうです。太宰府のお寺等の仏像も例外ではなかったのでしょうか。

野上家は山の中、保管場所もなんとか確保出来そうだが、という事かどうかは分かりませんが、幾つかの宝物を預かる事になっていったそうです。私が記憶しているのは、表の蔵の中に鍵の付いた扉があり、「そこには白蛇が住んでいる」と聞かされて、近づくのさえ怖かったのです。何が入っているかさえ知る由もありませんでした。

昭和二四年頃だと思ふのですが、アメリカの兵隊さんが三、四人ジープに乗って前の道をズーッと庭まで乗り付けてきたのです。その時は風邪を引いてお座敷に寝かされていました。ガラス越しにその場面しか見られなかったのです。叔母(父の末妹)は当時一四、一五歳でした。叔母は「おまえがお茶を出せ」と父に言われて、隠居部屋の奥の間でお茶を出しました。「ユアシスター？」と

彼等の一人が父に尋ねたので「オ―イエス、イエス」と父が答えたそうです。叔母の話では、その時兵隊さんは蔵の中を見るだけで、何かを持ち帰ったという事はなかったようです。論文では宝物は昭和二一年に所蔵者に返却されたと書いてあります。この時宝物はまだ保管されていたのか否かも不明です。

私がまだ四、五歳足らずの頃の出来事だったので。今となってはアメリカの兵隊さんが山深い所に一体何の為に見えたのかと、新たな疑問が湧いてきました。そして母のある言葉が思い出されました。終戦の時、祖父から「万が一の事があつたら誰でもそれなりの覚悟をせにゃんばい！」と聞かされていたそうです。その事を聞いたのは中学生だったと思います。まだその深い意味は分かりませんでした。国宝等をお預かりしている責任を感じての事だったのかと、今七〇歳を過ぎてその頃の祖父や父たちの心情がせつなく思われます。

(註1)伊崎俊秋「福岡県における太平洋戦争中及び戦後の文化財保護―国宝、重要美術品等の疎開(防空施設など)―(高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』1、中国書店、二〇一四年)二五―三五頁。

### 里芋の葉の露と七夕

八月六日は旧暦の七夕の準備をする日でした。ちなみに私たちが子供の頃は雛祭りも端午の節句も旧暦、というより一か月遅れで行っていました。八月の五日くらいになると、祖父住五郎が古新聞を二つ折りにして切った一・五メートル程の細長いものを私や弟に作らせて、七夕の字の指導をしてくれました。しかしその前に大切な事があるのです。朝早く起きて里芋の葉に溜まっている直径一センチメートル程の水溜、つまり朝露を集めて硯に取ります。この水で墨をすると「字がとでも上手くなる」との言い伝えがあるのです。その水玉は朝日に映えて眩しく銀色に光っていました。この水がまた大変でした。何しろ先ずなかなか見つかりません。あつたとしても葉っぱに触っただけでポロリと落ちてしまうのです。今考えればこう言うことも練習の一つだったのかも知れません。

いつもはとて「怖い爺っちゃま」でしたが、字の練習の時は大きな手で筆を持った私たちの手を取り指導してもらいました。六日になり少し字の形がそれらしくなつてから白い七夕用の掛け軸に清書をして、それをお神棚の

横に下げました。早めに夕食を済ませて、男衆が切ってきてくれた二、三メートル程の竹に、家族の手のあいた者から折紙を折ったり短冊に思い思いの文字を書いたりして、祖父の作ったコヨリをそれぞれに通して竹の枝先に結びました。その時祖母が必ず着物の形に切った色紙を吊してくれました。女の子が裁縫が上手になるようにとの願いでした。残念ながら効果はゼロです。

この時のコヨリは祖父住五郎が一番上手でした。古い書類の和紙を一、二センチメートル幅位に細く裂いて両手の親指と人差し指で縫っていくのです。ピンと伸びたコヨリはさすがというか子供心に感心したものです。ホチキスやゼムピン等ない頃、殆どの書類を綴じたりするのはコヨリという手段でした。立派なりサイクルだと今は感じています。

すっかり短冊や折り紙で飾り付けられた笹竹は、翌朝七日の早朝に下の川原に持って行き突き立てるのです。川下の方を眺めると、金井原の各家々が飾り付けた笹竹が石跳のそれぞれの間に突き立てられて、なんとも嬉しい華やかな景色でした。その川の水で顔を洗い、更に泳ぐとその年は風邪を引かない、という言い伝えがありました。私は弱虫で顔は洗い

ましたが、泳ぐ事は出来ませんでした。ちなみに石跳びというのは川幅に大きな石を並べ橋の替わりをしたものです。水の少ない時はびよんびよん跳びながら渡るととても楽しいのですが、雨が降り水かさが増すと石はもう水の中に沈んでしまい渡れなくなるのです。金井原と分田側を行き来するには石跳びが一番近道でした。

### テレビが来た

日本でテレビ放送が昭和二八(一九五三)年に東京で始まったと記憶しているのですが、昭和三一年に福岡でも始まったと思います。千足(せんぞく・地名)に入りの電器屋さんがいて、いつも何故か夕方になると「こめんくたさい」とやってくるので、「あら！また電器屋さんが見えたばい。晩ご飯が一人分増えたばい。」と言うような雰囲気でした。その彼が福岡のテレビ放送が始まってからどのくらい経過したかは定かではないのですが、昭和三十一年の秋頃ではなかったかと思えます。「お宅へんにテレビが映るかどうか試験的にちよつと一時置かせてください」。この一言で彼は家の周りのあちこちにアンテナを立てては、テレビの写り具合を試してみる事を何

度も繰り返して、遂に綺麗な画像を見つけました。「なんとか写るごたるけん、暫く置いて行きます。」という事で、テレビが「御前の間」に鎮座することになってしまいました。その後はズルズルとテレビの楽しさやニュースの魅力に皆とりつかれて、遂に買う羽目になったと言う訳です。お金のことを言うのもなんですが、確か一六万円でした。日本でテレビ放送が始まって平成二五(二〇一三)年で六〇年ということ、テレビの歴史特集番組が何かで当時の価格が一四万から二〇万円位だったと報じていましたので、まあそんなところだったのでしよう。

現在はテレビは殆ど二四時間放送していますし、いくつものチャンネルもあります。しかし当時はNHKだけで、しかも朝六時から二時間位放送があつて休み、またお昼二時間位あつて休み、夕方から午前〇時迄で、何か特別のことがあつたときはずっと放送していた様でした。しかしテレビの前には祖父の手書きで「テレビは九時迄、特別の時はテレビ主任に申し出る」という紙がしっかりと貼ってありました。

またある時は祖父が庭に柿の木を植えて、小さいながらも実が付き始めた頃、三〇センチメートル位の木札に自分の手形を書いて黒く塗りつぶし、横に「この木に触ると(手)が腐れる」と書いてその札を柿の木にぶら下げていました。とにかく何でも書いたものを貼り付けたり、下げたりするのが趣味のような人でした。

昭和三二、三三(一九五八)年頃から大相撲の中継が始まりました。午後三時から始まるのですが、家族皆大相撲は大好きで、暇さえあればテレビの前で声を上げながら観ておりました。時には「五日間の場合の内一日を「相撲見」と称して出入りの男衆たちにお酒を振舞つておりました。近所の祖父の幼な友達も良く相撲のテレビを見に来ていました。楽しそうにお酒を酌み交わしていたのを思い出します。

テレビがきて間もないころのある時「戦艦大和」の映画が放送されることになりました。その日祖父は男衆に指示して、分田の集落中に「テレビで戦艦大和がある」ので、よかつたら観に来んのと触れさせました。その夜は夕食も早く済ませ、障子、ふすまも取り外していました。いよいよ放送が始まるともうテレビの前は人だかりで、家族の居場所もないくらいでした。私には内容ははっきりとは理解できなかったのですが、ほとんどの大人の人は涙を



流し感激して観ていました。「旦那様、今日はえらいよかもんを見せてもらいました。有り難うございました。」と、口々に言いながら喜んで帰って行きました。戦後まだまだ間もないころの事です。当時の人々の心の中には、すぐそこに、戦争の記憶が残っていたのでしょうか。

### 臭木虫(くさぎのむし)の蒲焼き

昭和二五、二六年頃浮羽町の有名なつづら棚田から、更に林道を登って行くと、平山(ひらやま)という所に、一人暮らしの老人がいました。失礼な話ですが、いつ入浴したのかと思われる様な恰好のその人が、時折夕方になると「旦那様、臭木虫が取れましたけん食べち下さい。」と小枝の先に大人の中指程の乳白色の幼虫を、一〇匹程頭の部分を串刺しにして、二三本持つて来ていました。祖父はその人に何某かのお金を渡しておりました。

それは蜂の幼虫を大きくした様な姿です。その虫を母が醤油と砂糖で蒲焼風に味付けて七輪で焼き、食する事になるのです。幼児期の私は虚弱体質でその虫が体に良いという事で、有無を言わず食べさせられました。「あの虫を焼く時は、もうすぐく気持ちが悪かったよ」と、ある時母が話

してくれた事がありました。その虫を目にするだけで身ぶるいしたものです。「食べないと怒られるし」。今でも余り思い出しにくい思い出です。

『広辞苑』によりますと、「幼虫は臭木の虫といって、クサギの株につく虫で蝙蝠蛾(こうもりが)の幼虫。疳(かん)の薬として用いられた。臭木はクマツヅラ科の落葉小高木。山野に多く自生し、高さ約三メートル、葉は大きく、茎・葉に悪臭がある(一部略)、古くから染料に使われた。」と書かれています。若葉は食用だそうです(註2)。

また「孫太郎虫」は、「臭木の虫」を私が食べた時の形状と全くそっくりです(註3)。この虫も漢方薬の原料で「疳の薬」に用いられたそうです。

七〇歳を超えた今思い起こしますと、物の乏しい頃私の事を思い、祖父始め大人たちの愛情の表れだったのかと遅ればせながら感謝致しております。

(註2) 富成忠夫『野外ハンドブック』樹木二(山と溪谷社、一九九四年第七七回版(三五二―三五三頁))。

(註3) 難波恒雄「昆虫蛇トンボの幼虫」『原色和漢薬図鑑』五七下(保育社、一九八〇年)一七頁。

### あとがき

父が亡くなった折り、蔵の長持ちを整理している時、江戸時代の文書が数点出てまいりました。何が書いてあるかさっぱり理解出来ず、しかしゴミにしてしまうにはなんとも御先祖に対し申し訳ない気がいたしました。人伝に厚かましくも、秀村選三先生を紹介していただきました。九州大学名誉教授であられ、しかも日本学士院賞恩賜賞、徳川賞等を受賞なされています。秀村先生は文書を御覧下さいました。とても有り難いことになりました。そのような事から私のような者が厚かましくも様々な事で御指導を賜るという身に余る御光栄に浴させていたただいております。先生からのお優しいお声掛けに、このような拙いものを書かせていただきました。書き足りない事がまだまだいろいろあります。おこがましくもまた次の折にと思っております。(平成二九年六月)

### 【野上家について】

ご投稿いただきました久良木チヨさんの実家である野上家は旧筑後国生葉郡新川村分田名に所在しています。野上家は分田名の名頭であったと考えられており、旧久留米藩の官山の管理役をしていたこと

が確認できません。近世初頭から有力な林業経営家でした。また農地は昭和三(一九二八)年現在で田畑一二町三反歩、小作人二五戸と記録されています。山林は農地改革の対象から免れたことにより、保有面積は最も少ない時で三七〇ヘクタール所有しております。この規模は全国で一%にも満たない大規模山林地主でした。

野上家に所蔵されている史料は一四五〇番まで採録済ですが、今回本文に引用されている史料(「カギ括弧表示」)は全て未採録史料です。(地域史料研究会・福岡山口信枝記)

### 参考文献

- ・福岡県地域史研究所「筑後国生葉郡新川村野上家文書仮目録(一)」(福岡県地域史研究)第二二号、二〇〇四年、一六七―二一五頁。
- ・福岡県地域史研究所「筑後国生葉郡新川村野上家文書仮目録(二)」(福岡県地域史研究)第二二号、二〇〇五年、一五一―一八四頁。
- ・福岡県地域史研究所「筑後国生葉郡新川村野上家文書仮目録(三)」(福岡県地域史研究)第二三三号、二〇〇六年、一一一―一五九頁。
- ・福岡県地域史研究所「筑後国生葉郡新川村野上家文書仮目録(四)」(福岡県地域史研究)第二四号、二〇〇七年、一八九―二三二頁。
- ・山口信枝「山林地主家(福岡県へ嫁いできた女性たち―ねんねんばばしやま―)の明治・大正・昭和」『福岡県地域史研究』第二五号、二〇〇九年、六一―一八五頁。

## 研究会からのお知らせ

### 懇話会報告

第二七回以降の懇話会の報告者とテーマは以下のとおりです。なお、懇話会の報告内容と当日配付された報告資料の一部を研究会のサイトに掲載していますのでご覧ください。

第二七回 二〇一七年一月二日  
時里奉明氏

安高文書の世界

―「安高団兵衛の記録簿」の成果と可能性について―  
第二八回 二〇一七年三月四日

八嶋義之氏

福岡藩における宗門改制度



第二九回 二〇一七年四月二日

中村 琢氏

江戸時代後期における

英彦山派末派山伏の成立

―唐津を事例に―

二〇一七年度の懇話会予定

今年度も懇話会を福岡市天神のエルガーラオフィス六階、久留米大学福岡サテライトで次のとおり開催する予定です。どうぞご参加ください。

〔第二九回〕四月二日(土)(終了)

〔第三〇回〕六月二日(土)

〔第三一回〕九月二日(土)  
終了後、会員総会を開催

〔第三二回〕十一月四日(土)

〔第三三回〕来年一月二〇日(土)

〔第三四回〕来年三月三日(土)

### 報告者の募集について

懇話会の報告者を募集しています。報告をご希望の方は事務局にご連絡ください。なお、報告資料の印刷等お手伝いが必要な場合も、ご遠慮なく事務局にご相談ください。

### 当会誌への投稿について

当研究会が発行しているこの『研究会報』の原稿を随時募集しています。

研究会の目的に沿ったもので

あれば、原則として内容・形式を問いません。ただし、編集委員会から若干の修正をお願いする場合がありますのでご承知おきください。

『研究会報』の刊行は基本的に研究会のウェブサイトで上の公開によって代えています。サイト上のPDFファイルをダウンロードしていただくことも可能です。印刷したものが必要な場合には事務局にご相談ください。なお、印刷した『研究会報』は懇話会など研究会の会合の際に配付していますのでご利用下さい。

投稿いただく際の原稿は、手書きでも結構ですが、できるだけワープロ・ソフトのファイルやテキスト・ファイルなど、電子データで提出していただくようお願いしています。

また、『研究会報』は本格的な印刷ではないため、使用文字等に制約がある場合があります。図版・写真等の掲載も可能ですが、著作権に抵触しないようご注意ください。提出していただく原稿は横書きでも結構です。字数は制限していませんが、八千字以上になる場合にはあらかじめご相談ください。ご投稿をご希望の方は編集委員へご連絡ください。

(hensyu@chikishi.com)

### お知らせとお詫び

―研究会ウェブサイトの不調について―

本年三月下旬から当研究会のウェブサイトが、機器老朽化による不調のため、掲載している内容が更新できない状況が続いています。会員をはじめ、利用者の皆様には大変ご迷惑をおかけしています。心からお詫び申し上げます。

現在、七月中の復旧を目指して準備を進めております。機材の調達からサイトの再構築完了まで、今しばらく時間を要すると思われまますので、何卒ご了承をお願いいたします。

復旧次第、会員の皆様にはメール等でお知らせいたします。

なお、研究会宛のメールはこれまで通りご利用いただけますので申し添えます。

### 研究会報 第一四号

(県史だより 通巻第一四四号)

平成二九年六月二四日発行  
編集・発行

地域史料研究会・福岡

jimukyoku@chikishi.com

http://www.chikishi.com